

# 宝くじ おもしろ話

## 不思議な数字「3%」 ビギナーズ・ラック

宝くじの世界にも「ビギナーズ・ラック」がある。初めて宝くじを買ったら、大当たりというケースだが、長年、買い続けても「当たらない」というファンには悔しい話だろう。

みずほ銀行宝くじ部では昭和47年度以来、宝くじの高額当せん者を対象にアンケート調査を行い、結果を「宝くじ長者白書」として毎年発表。そして、昭和58年度から設問に「宝くじの購入キャリア」を追加したところ「今回が初めて」という人が「5%」もいた。今日までの

平均だと毎年「3.3%」で、これは、高額当せん者の100人のうち3人は「生まれて初めて宝くじを買ったら大当たりしている」という次第。

平成時代だけで見てみると、8年度以降から年度間の数字が乱高下して平均2.1%で、昭和時代と比べて「ツキが下降」。初挑戦の人にとっては「残念」ということになるが…。

こうした「ビギナーズ・ラック」の数字は、「新規ファン層の増減率」ともいえる。その数字にも「ツキ」は存在するが、基本的には日本の人口の増減や宝くじ購入年代層の変化、さらには宝くじの新商品登場や最高賞金額のアップなどによる宝くじ人気の変化も大きく影響している。こうした数字からも宝くじの時代的な変化を見ることができる。



ご当地クーちゃん  
讃岐うどんクーちゃん

### 当せん者エピソード

# 宝くじ こぼれ話

## 当せん者の因縁話あれこれ 謙虚に学んで正夢つかもう

「イワシの頭も信心から」だが、当せん者たちの「因縁話」のあれこれをお届けしよう。

◎**天の声**＝埼玉県会社員Kさん（45）は春先に夢で「今年は宝くじを買いなさい」という天の声を聞いた。そこでサマージャンボミニ（第664回全国自治宝くじ）を50枚購入したら2等600万円に当せんした。

◎**残り福**＝群馬県農業Sさん（60）はサマージャンボ宝くじ（第663回全国自治宝くじ）の発売最終日に売り場へかけ込んで、最後に残っていたバラの10枚セットを購入。そ

うしたら「残り福」で3等100万円に当せんした。

◎**鳥のフン**＝千葉県の農業Kさん（56）はオータムジャンボ宝くじ（第668回全国自治宝くじ）を買って手に持っていたら、飛んできたムク鳥が宝くじ券にフンを落としていった。そうしたら1等の前賞3,000万円に当せんした。

◎**へびの抜けがら**＝埼玉県主婦K子さん（60）は自宅庭でへびの抜けがらを発見。「何かいいことが」と期待しながら、暮れに第2330回関東・中部・東北自治宝くじ（初夢くじ）を購入。そうしたら「一富士賞」の100万円に当せんした。

「当たれば官軍」の宝くじだ。負けずに、うーんとこだわって、買い続け、道を究めよう。



ご当地クーちゃん  
みかんクーちゃん

# 宝くじ おもしろ話

## 「宝くじ」から「たぬき」で 「カラクジ」→「ハズレ」

夢の商品「宝くじ」としては、購入者に夢をより楽しんでもらえるよう、発売側は常にあれこれと心掛けて商品提供している。しかし、ときに思わぬことが起きたりする。ここに紹介の写真の場合もそうした例だ。



写真は平成21年11月発売の「第354回地域医療等振興自治宝くじ」。図柄は「身近な動物シリーズ」の1つで、今回は日本で生息する「たぬき」がテーマだ。

宝くじ販売の世界で「たぬき」はいろいろな場面でタブー視されている。理由は「タカラクジ」から「タ」を「抜く」と「カラクジ(空くじ)」になるから。というわけで、宝くじの図柄に「たぬき」の登場は、これが初登場かも…。

「たぬき」の話題をもう1つ。宝くじ発売の受託銀行・みずほ銀行。その担当部署の宝くじ部で昭和40年代半ばから50年代末までに5人の宝くじ部長が赴任した。その部長の苗字は順に「山田→前田→吉田→田中→山田」だった。つまり、連続して「タ」が付いており、これが新聞ダネに。記事では『宝くじ部長なので「タ」をはずせません。カラクジになりますので』とあった。心あたたまるニュースに、全国の宝くじファンも喜んだというお話だ。



ご当地クーちゃん  
夜神楽クーちゃん